



## 1 内部に線刻壁画をもつ多角形墳

吉田古墳は、大正3年に地元の加藤徳之助氏によって発見されました。その後、東京帝国大学(当時)の調査により、内部の埋葬施設(横穴式石室)の内部奥壁に線刻によって描かれた壁画(装飾)があることが明らかとなり、大正11年に国指定史跡となりました。その後石室は、露出した状態であったので、一部石室の天井が崩落するなど、史跡の保存上問題が生じたことから、昭和47年に、水戸市教育委員会による初の発掘調査と石室の復旧工事を行いました(第1次調査)。



水戸市教育委員会では、史跡の整備活用方策の検討を進めていくため、平成17年度から4か年にわたって範囲と内容を確認する発掘調査を行いました(第2~5次調査)。その結果、それまで指定されていた土地よりもはるかに大きい古墳であり、しかもこれまでいわれてきたような円墳でも方墳でもなく、八角形の可能性の高い多角形墳であることがわかりました。こうしたことから、平成22年8月には条件の整った一部について追加指定されました。

## 2 線刻壁画の描かれた石室 —38年ぶりの調査公開—

現在は、石室の整備活用の具体的方策を検討するための多角的な調査を進めております。ひとつは、平成22年3月より実施している自然環境調査であり、温度・湿度と墳丘内の土壌水分の含有率について調べているところです。

ふたつは、石室の発掘調査であり、現在の線刻壁画を含めた石室の保存状況について調べるとともに、3次元計測とレーザーキャンによる計測を行い、今後レプリカや模型製作を行う場合に必要基礎データを採取していきます。今回の石室の発掘調査は、昭和47年の第1次調査以来、38年ぶりの石室の調査・公開となります。

さて、その石室奥壁に描かれた線刻壁画とはどのようなものでしょうか。右の写真をご覧ください。その多くは武器・武具類と考えられています。こうした彩色や線刻によって壁画の描かれる古墳は、茨城県内では、14カ所18例のみであり、大変貴重なものです。

### 【用語解説】

大刀(たち)：長い身の片側に刃のあるもの。刃を下向きにして腰に下げたものをいう。

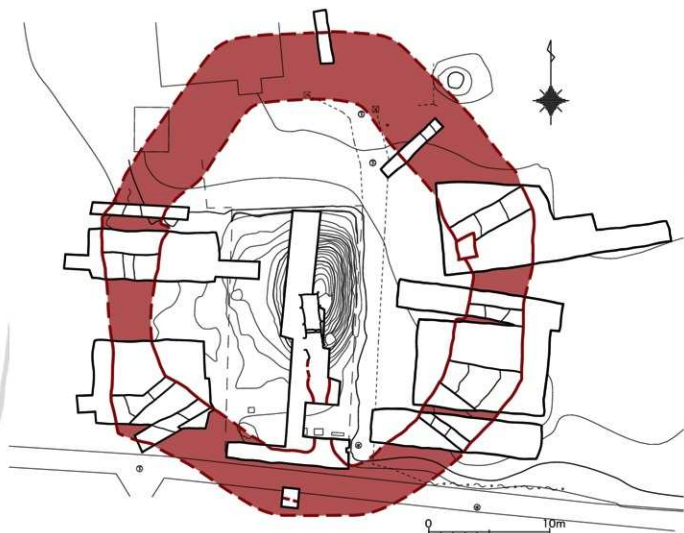
刀子(とうす)：現代でいうところのナイフ。食事・雑用にも使う。

鉾(矛, ほこ)：両刃に長い柄の付いたもの。敵を突き刺すのに用いる。

鞆(ゆき)：弓矢を入れて背負う道具。弓矢の先とともに描かれている。

柄(とも)：弓矢を射るときに、手元に装着する道具。太刀の下に描かれている。





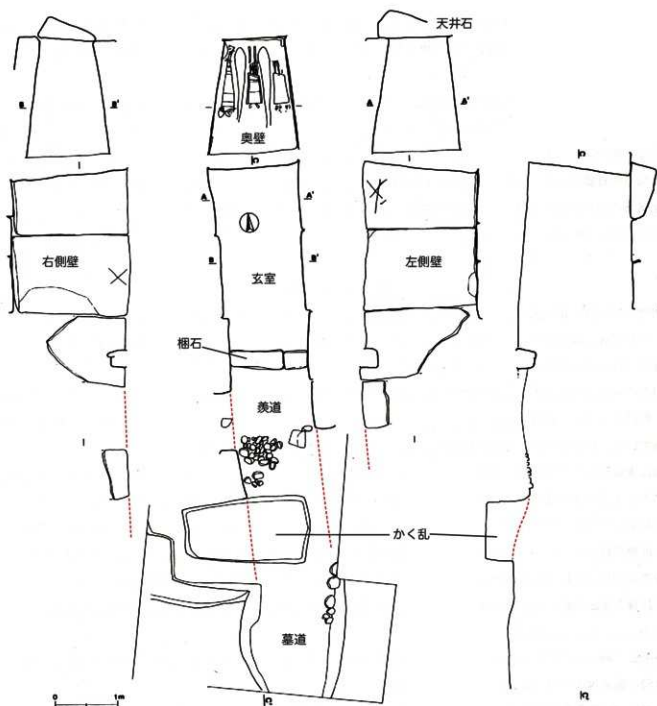
過去の調査で確認された吉田古墳の姿

### 3 吉田古墳の特徴と年代

これまでの調査結果により、吉田古墳が「石室奥壁に線刻壁画をもつ多角形墳」であることがわかりました。これを八角形と断定できないのは、条件が整わず、未だ発掘調査できない箇所があることや八角形とするには形が歪なことが挙げられます。ただし、多角形墳の多くが八角形であることや、今わかっている箇所を結んでいった結果、八角形とするのが最も考えやすいことから、八角形の可能性が十分に高いものと考えられます。八角形墳は全国で20例ほどわかっていますが、線刻などの壁画のあるものは、今のところ吉田古墳において他にありません。

ところで、吉田古墳はいつの時代につくられたものなのでしょうか。古墳の年代を考えると、副葬された品々の姿・形やその組合せなどの複数の要素を十分に検討して推定されます。しかしながら、吉田古墳は、かつて長い間石室が開口したままで盗掘も受けていたといわれており、現在知られている出土品は、わずかに銀環・鉄鏃等が知られているのみで、その年代を出土品から推定するのは難しい状況です。

現在大きなてがかりとなるのは、残された古墳の形(墳形)と石室の特徴です。多角形墳のほとんどは、古墳時代でも終末期といわれる7世紀につくられたものがほとんどだといわれております。一方、那珂川沿岸の地域で、発掘調査などにより横穴式石室の特徴がよくわかっているものを調べてみると、彩色壁画古墳として有名なひたちなか市虎塚古墳(国指定史跡)が、よく似ているけれども、両側壁が左右異なる数の石によって構成されるなど吉田古墳の石室よりも古い要素も持っていることが知られています。虎塚古墳は7世紀前半頃と考えられますので、吉田古墳は7世紀でも虎塚古墳よりも新しい中頃であるというように考えられます。それは、今から1,300～1,400年ほど前のことです。



過去の調査で確認された吉田古墳の姿

#### 4 吉田古墳の石室構造

吉田古墳の内部にある埋葬施設は、半地下式単室構造の横穴式石室です。壁と天井は一枚石を組み合わせて構成されています。石室への入り口となるのは、墓道と呼ばれるもので周溝から連続しています。手前に羨道と呼ばれる部屋状の導入部があって、一番奥の遺骸を納める玄室に続きます。単室構造と呼ばれますが、手前の羨道はあたかも玄室のような部屋状になっており、単なる道とはいえないものです。玄室と羨道の間の足元には、横長で平らな石材が置かれています。これは榦(しきみ)石と呼ばれ、玄室と羨道を区切るものです。玄室から羨道まで両側壁は同数で構築されていますが、玄室への入り口(玄門ともいいます。)周辺から、後世のかく乱により失われてしまっており、詳しい状況はわかりません。

なお、石室を構成する石材は、水戸周辺の崖などでしばしば露出している第三紀の水戸層と呼ばれる灰色凝灰質シルト岩(泥岩)によって構成される岩石層です。珪藻質で非常に軽く、風化面に平行して崩れ落ちる性質をもっています。風化すると白色または淡灰色、水に濡れると暗灰色かまたは暗褐色となります。

## 5 今後に向けて

これまで、史跡の内容と範囲の確認のための発掘調査、石室のための自然環境調査及び発掘調査、と平成17年度より、吉田古墳の歴史的な意義とともに、その保存整備と活用のための具体的方策について、継続的に調査・検討を進めてきました。

今後もこうした調査・検討を鋭意進めていくことで、我が国の古代史上大きな価値をもつ史跡を、訪れる人誰もが史跡の内容や性格について学ぶことができ、本市を代表する歴史的資源として多方面での活用に供することができる整備を目指していきます。



### 【用語解説】

**古墳：**土を盛り上げて墳丘(塚)をつくり、その中に棺などの埋葬施設を納めた墓をいいます。その地域の首長や有力豪族などが埋葬されたと考えられています。墳丘の形は様々ですが、主に前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳などがあります。同じ時代につくられたもので比べたとき、形や大きさは葬られた人の社会的地位を示しているといわれていますが、時代や地域によって形や大きさに特徴もあり、簡単に説明することが難しいのが現状です。墳丘は階段状につくられることがあり、これを段築といえます。また墳丘の周囲には、墓域を明確にするための溝、堀状のものをめぐらせていることがあり、これを周溝といえます。

棺を納める埋葬施設は、時代によって大きく違いがあります。吉田古墳にみられた横穴式石室は、中国から朝鮮半島を経由してもたらされたものと考えられており、すでに4世紀の終わり頃の北部九州にみられます。関東地方では、古墳時代後期とよばれる6世紀以降、一般的にみられるようになります。

**古墳時代：**今からおよそ1,300～1,700年前（3世紀後半～7世紀後半）、古墳がさかんにつくられた時代をさします。古墳の大きさや形、副葬品の構成などは、時代によって大きな変化があり、こうした時代背景も加味して、現在は前期（3世紀後半～4世紀）、中期（5世紀頃）、後期（6世紀頃）、終末期（7世紀後半頃まで）と大きく四つに分けて考えられています。とくに中期とよばれる時代には、100mをこえる古墳がいくつもつくられるようになり、巨大墳墓を築くために多大な労働力を投入し、その巨大墳墓をみせることによって、当時の権力者は自分たちがもちえた権力を誇示しました。

水戸市内にも多くの古墳が所在していますが、なかには十分な調査がされることなく、破壊されたものも少なくありませんでした。市内で最も大きな古墳は、愛宕町にある愛宕山古墳（国指定史跡）です。全長約136m、高さ約10mの巨大な前方後円墳です。5世紀の中期古墳と考えられております。